

近代日中仏教交流史研究の新たな進展

——中村薫『日中浄土教論争——小栗栖香頂『念仏円通』と楊仁山』を評す——

陳 継 東

はじめに

日中仏教の交流は千年以上の歴史があるが、その中で、仏教者同士が真剣にそれぞれの所信を表明し、批判的に議論しあうことはほとんど見られなかった。ところが、近代に入り、日本仏教の中国伝道が始まってから、日中仏教者の仏教理解の相違がはっきりと現れている。評者の研究領域では、少なくとも二つの論争があった。一つは、十九世紀末から二十世紀最初の数年間まで、中国仏教者による浄土真宗への批判と日本側の反論、もう一つは一九二〇、三〇年代に断続的に行なわれた「東密」（日本密教）をめぐる論戦である。前者は日中仏教者の直接対決であり、後者は中国で広められている日本の密教（真言宗）に関する、中国仏教者との対立である。中村薫氏の最新著作の『日中浄土教論

争—小栗栖香頂『念仏円通』と楊仁山』(法蔵館、二〇〇九年。以下は、『論争』と略す)は浄土教学に関して、日中仏教者の争点を明らかにしようとするものである。

一

まず、本書の内容を概観する。

本書は、四章と資料の訳註から構成されている。その目次は、はじめに

第一章「楊仁山と小栗栖香頂」

第二章「楊仁山の法然批判」

第三章「浄土の菩提心」

第四章「楊仁山と小栗栖香頂の二十一の問答」

おわりに

付篇の訳註『念仏円通』である。

「はじめに」では、論争の参加者を挙げながら、双方の教学的な理解が「円融と選択」の立場の相違だと指摘されている。楊文会(字は仁山)を代表とする円融的立場は慧遠に始まる蓮宗の流れで、小栗栖香頂・龍舟を代表とする選択

的な立場は法然・親鸞によって選択された曇鸞・道綽・善導の流れであると氏は指摘する。

第一章は主に論争者の生涯と思想傾向を紹介する。楊文会は中国の清末におけるもっとも重要な仏教者で、仏教界のみならず、近代中国思想界にも大きな影響を与えた存在である。小栗栖香頂は一八七三年、中国北京に一年滞在し、江戸中期以後ほぼ中断された日中仏教の交流を再開させ、一八七六年、上海で浄土真宗東本願寺上海別院を創設し、中国で中国人を対象にして浄土真宗の教えを布教した人物で、日本仏教の中国伝道の歴史を切り開いた先駆者である。小栗栖が一八七六年、中国伝道のために著した『真宗教旨』はその論争の種になった。

第二章から第四章までは、小栗栖の『念仏円通』の内容にしたがって、その争点を並べている。『念仏円通』は序文に相当する部分、源空の伝記（「挙源空上人小伝」）、選択本願の宗旨（「示選択本願為宗」）、二種の菩提心（「辨菩提心差別」）、さまざまな疑問非難への答え（「随難別解」）となっている。

第二章はその序文の部分と法然の伝記に紹介された法然の浄土思想に対して、楊文会からの批判をまとめている。主に、菩提心の否定、經典との相違、正法・像法・末法という三時の認識、難易二道の関係などが挙げられている。また、法然が大勢至菩薩の化身という伝説への異議、念仏の意味すなわち口称念仏と憶念（心念）念仏が分けられないという認識が楊文会に示された。さらに法然の選択本願を宗とする考えへの批判も行なわれている。両者の争点について、中村氏はつぎのように要約している。

「ただ、選択本願の称名念仏の仏教が、釈尊の教説に基づいているかどうかが問題であったのである。そして、法然・親鸞と伝承されてきた浄土真宗の教えは、本当に仏教の教えに合致しているかどうか。本来の仏教から逸脱していないかということが、

最大の関心事であったのである。「だから中国浄土教では、とうてい選択本願とか、絶対他力ということは容認できないのである。決して、自力と他力、聖道門と浄土門などをわけて、どちらかを選び取ることは許されないのである。どこまでも、自力他力、聖道浄土などの概念は、相互に円融の關係として存在するというのである。だから、せいぜい半自半他力なら納得できるといふのは楊仁山の変わらない主張である」(同書、五〇頁)

第三章は、「菩提心の差別」と「二双四重菩提心」に基づいて、菩提心が念仏往生の因になるか、ならないかの論議をめぐる争点の整理である。小栗栖は『念仏円通』の中では、菩提心を自力の菩提心と他力の菩提心に区別して、法然と親鸞の教説を弁明している。つまり、法然と親鸞は菩提心それ自体を否定するのではなく、否定するのは自力の菩提心で、第十八願の他力回向の信樂を横超他力の菩提心として認めているという弁明である。その根拠が善導に求められるという。しかし、菩提心を起して、念仏などの修行をへることを、成仏や往生の根本的な要因とする楊文会にこの教説はとうてい理解できなかった。しかも、楊文会は、善導にはこのような説が全く見られないという。この違いについて、中村氏はつぎのように説明している。

「特に善導教学に対して、中国仏教から見た善導觀と法然を通して出来上がった日本浄土教の善導觀との違いである。故に楊仁山は曇鸞、道綽、善導の三師の教学を批判するのではなく、あくまでも法然を通して語られる善導等の教学は、經意に反しているというのである。それに対して、小栗栖香頂は、法然・親鸞の浄土教は、中国三祖の流れをくむものであり、全く經典の意から逸脱していないというのである。両者の見解は、中国浄土教と日本の浄土教のそれぞれの流れの溝を埋めることにはならなかったのである」(同書、七四頁)

第四章は、分量としては、本書の本文頁数の約半分を占め、『念仏円通』の最後にある二十一の疑難にしたがって、二十一の節を立て、その争点を並べている。それには「經意に違ふ」、「聖道と浄土」、「一生造惡」、「親縁・疎縁」、「親

疎の行、「念仏往生の願」、「本願文の撰取選択の同異」、「弥陀の撰取」、「般若」、「菩提心」、「取捨の心」、「念声是一」、「一向の言」、「九品行法」、「法事讚」、「諸仏証誠の唯念仏」、「選択讃歌」、「念仏多門」、「隨念一門」、「持名念仏」、「十六法門」がある。その疑難のタイトルから、多くの内容が前の第二、三章の中でも論議されていることがわかる。

最後の「おわりに」では、その論戦について中村氏自身の総括と評価が示されている。その中にはつぎのような論点が含まれている。

① この論争は単に個人的なことではなく、中国浄土教と、特に日本の浄土真宗との教学の相違を浮き彫りにするものであった。

② 楊文会の法然批判は単に中国浄土教と日本浄土教の違いから生じただけでなく、日本仏教思想史の中でも見られるものである。例えば、法然と同時代の明恵、貞慶らは、菩提心や念仏などについて、法然を痛烈に批判している。さらに、氏は「法然あるいは親鸞の浄土教学は、仏教全体からみれば決して多数派とはいえないのである。むしろ少数派といった方がよいであろう。」と指摘している。

③ 楊文会を代表とする中国蓮宗の浄土教は聖道門との融合の上に成立したものであるが、親鸞の他力は自力を否定しているのではなく、自力無効の自覚により、他力が仰がれてくるのである。よって、浄土真宗は決して大乘仏教とは別のものではない。

④ 真宗教学の立場から見た楊文会の真宗批判の意味について、氏は「真宗の教えが、世界の人々に伝えられる教えになるにはどうすればよいのか。楊仁山の指摘は謙虚に受け止めなければならないであろう」（同書、一七八頁）と

述べている。

楊文会の真宗批判に対して、拒否ではなく、むしろ真剣に受け止める積極的な姿勢が示されている。

二

以上、本書の内容と論点を簡略に概観した。評者もこのテーマを十数年にわたって研究してきており、資料の調査と整理、その内容の分析などには多大な時間を費やした。その成果は拙著『清末仏教の研究―楊文会を中心として』（山喜房、二〇〇三年）に収められている。特に楊文会と小栗栖香頂らとの論議の資料は拙著にも収録し、また「日本浄土真宗との論争」という一章を設けて、その全容を明らかにしようとしてとめた。以下は、評者の今までの研究を踏まえて、中村氏の『論争』の問題点を検討していきたい。

第一、資料について。評者の調査では、楊文会と小栗栖らの論争にかかわる資料はつぎの通りである。

まず、『楊仁山居士遺著』の「闡教編」（一九一七年編集された）には「闡教芻言」、「評真宗教旨」、「評選撰本願念仏集」、「評小栗栖陽駁陰資弁」、「評小栗栖念仏円通」、「雑評」がある。また、同書の『等不等観雜録』巻四には、「評日本僧一柳純他力論」、「評日本僧一柳読観経眼」があり、『等不等観雜録』巻八には、「与日本南条文雄書二十二」、「与日本南条文雄書二十三」、「与日本後藤葆真書」、「与日本龍舟書」がある。次に、大谷大学図書館所蔵の資料には、小栗栖香頂の『真宗教旨』、『陽駁陰資弁』、『念仏円通』と龍舟の『陽駁陰資弁統紹』、『念仏円通統紹』、『与楊仁山居士書』が

ある。ただし、『等不等觀雜錄』に言及された一柳知成の『純他力論』と『読觀経眼』は現時点ではまだ確認していない。後藤葆真の『応于楊公評駁而呈卑見』が一柳知成の「清朝末期における選択集の評難並に引」(『真宗字報』第五号。本資料を提供して下さった中村氏に謝意を表す)に紹介されている。

以上の資料によれば、この論争に巻き込まれた人物は中国側は楊文会一人だったが、日本側には小栗栖香頂、龍舟、後藤葆真、南條文雄、一柳知成の五人がいたことがわかる。中村氏の『論争』は小栗栖の『念仏円通』と龍舟の『念仏円通統紹』、および楊文会の「評小栗栖念仏円通」の三つの資料しか使っていない。よって、資料の観点からみれば、『論争』は『念仏円通』という資料の解説書といえるが、「論争」の全容解明には至らず、全容解明の扉を開いた段階にあるといえよう。

第二、論争の背景と経緯について。この論争は浄土真宗が中国伝道を始めから約二〇年以上経った時点で発生したものである。なぜこの時点でこのような論争が行なわれなければならないか。この問題について、中村氏の『論争』はほとんど触れていない。実際、楊文会は一八八〇年代の初め、ロンドンで外交官を務めている時に、すでに親交のあった留学中の南條文雄に対して、真宗の絶対他力の主張に関する疑問を呈示していた。一八九〇年代から、楊文会「馬鳴宗」という融合的な仏教体系を構築し始め、すべての宗派的な教えは通じ合いかつ同等的な思想であると主張し、「聖道門」と「浄土門」、「他力」と「自力」などを峻別する真宗の教旨に対して、真正面から論議する必要性が一層強まったと考えられる。評者はかつて、この論争を「思想的な対立」と捉えているが、中国における浄土真宗への反発も一つの背景として考える必要があると思う。中村氏の『論争』ではこの問題を取り上げていれば、さらなる研究の

深化を果たせたのではなからうか。

また、小栗栖香頂の中国伝道の背景について、中村氏はつぎのような認識を示している。

「明治六年（一八七三）、小栗栖香頂は本山の改革を諦めつつも、なお本山の近代化を願ひ、彼は始めて教化伝道のため、中国へ向かうことを決心するのである。そこで仏教徒の連帯を求めて、インド・中国・日本の三国同盟を主張するのである。彼は当時荒廢していた中国仏教界にかかわって、自ら中国人に真宗仏教を説くことから始めなければならないと考えるのである。そのためには中国語で伝道すべきであると、長崎の聖福寺で、中国僧陳善・無等両名より中国語を学ぶのである」（同書、二二頁）

まず、三国同盟の構想は中国に行く前に、すでに練り上げられたかどうかが確認されていない。これは一八七四年北京で著した『北京護法論』の中ではじめて現れた言い方である。つぎに、中国にわたる前に、中国仏教界が荒廢しているという認識を持っていたというよりは、むしろ、ある程度の期待を抱いたというのが適切である。よって、上のような小栗栖の認識は中国に行ってから発生したもので、中国渡航の動機として認めてよいか疑問を残す。これについて、木場明志と北西弘の間で論争が行なわれた。木場氏は両者の論点をつぎのように要約している。

私は、小栗栖香頂の中国行について、明治初年の政府の対アジア政策から、諜報活動と現地拠点の確保を目的とする仏教利用という国家的要請が背景にあることを指摘し、真宗大谷派がそれに積極的に応えた結果であるとして、アジアの侵略の先鋒隊的・国家別働隊の性格を帯びた行動であるとしてきたが、それに対して、排キリスト教（欧米外圧対抗）仏教三国同盟は「鎖国より開国、攘夷より交際」に転じた時代の中で、仏教徒は、万国交際の精神的基盤は、仏教以外にないという自負を持っていた。……香頂は万国交際論にはげまされ、それを精神的背景にして入清した」とする北西弘氏による反論がある。（「近代における日本仏教のアジア伝道」、『日本の仏教』第二号、法蔵館、一九九五年、二二三頁）

中国仏教の荒廢を救うために、真宗を中国で広めるといふ中村氏の認識は、あえて言えば「万国交際論」といふ北西

氏の主張と近いもので、国家のアジア政策への協力と、廃仏毀釈による打撃から退勢挽回のために海外での活路を求め
る計略、という木場氏の指摘が考慮されていない。しかし、浄土真宗の中国伝道の性格をいかに認識するかはこの論争
が生じた原因の解明につながるものであり、今後さらに検討を加えなければならぬ。

第三、論争の内容について。中村氏は『念仏円通』と『念仏円通統』に基づいて、その争点を細かく紹介しており、
漢文に不慣れな現在の読者にとっては、大要役に立つものである。しかし、論争の全体像はかえって明確さを欠いてし
まったように思われる。評者は、かつてこの論争を八つの問題点にまとめた。それは、

- ① 円融と選択という基本的立場の相違、
- ② 聖道門と浄土門の関係、
- ③ 自力と他力の関係、
- ④ 菩提心の問題、
- ⑤ 十八願と四十八との関係、
- ⑥ 念仏と称名の意味、
- ⑦ 九品往生と念仏往生の問題、
- ⑧ 戒律の問題（『清末仏教の研究』、二六〇—二六二頁）。

①の基本的立場に関しては、中村氏と評者の認識が共通している。しかし、ここでいう円融とは、融けあって、全く
別な形態になることなく、宗派的な主張が認められつつ、互いにそのまま取り込み、通じ合った融合である。二者択

一の排他的な選択はそれと対照的である。よって、その他の相違はすべてこの基本的立場によって生じたものにほかならない。肉食妻帯に関する戒律問題については、『念仏円通』のなかで触れておらず、ほかの資料に含まれているため、『論争』では紹介されていない。しかし、菩提心に関しては、『論争』の分析が充実している。そのなかで、『華嚴経』における菩提心の検討を加えて、法然に対する明恵の批判、さらに親鸞の新たな展開を踏まえて、楊文会と小栗栖の論争をより広い思想的な文脈のなかで捉えることによって、両者の相違がいつそう明瞭になっていく。これは本書の大きい評価すべき点の一つである。

そのほかに、『念仏円通』と『評小栗栖香頂念仏円通』、『念仏円通統紹』の日本語訳注は本書のもっとも価値のある部分である。上述の資料はもともと漢文で、仏教の専門的な用語や經典の引用が多く含まれているため、平易な日本語の翻訳とその注釈が欠かせない。この点については、著者はかなり力を入れており、閲読には大きな利便を与えており、その思想研究に確かな文献を提供している。また、評者がかつて判読できなかった幾つかの漢字も解明されて、完全な形でそのテキストが復元できたことは、本書のもう一つの成果と言わなければならない。著者の労苦に敬意を表したい。

むすび

評者は、拙著『清末仏教の研究』なかで、次のように指摘した。楊文会の浄土理解は明代の雲棲株宏からの強い影響を受けており、その真宗批判はあくまで中国仏教思想の流れに沿ったものであった。そのため、彼ら論争は日中の浄土

思想の相違を浮き彫りにすることとなった。(同書、二二六二～二二六六頁)。この認識は上に紹介された中村氏の見解と一致している。しかし、中村氏の『日中浄土教論争』ではそれにとどまらず、日本の仏教思想史における明恵や貞慶の法然批判を踏まえて、いわゆる通仏教と法然・親鸞の浄土思想の相違をいっそう究明しようという姿勢が示されている。これはいうまでもなく、もはや日中浄土教の論争を超えて、大乘仏教における法然・親鸞仏教の特質と意義に対する探究を深めていき、新たな方向性が示されたものにほかならない。今後の成果が大いに期待される。

(武蔵野大学人間関係学科准教授)

中村薫著『日中浄土教論争』法蔵館、二〇〇九年九月一〇日発行

A五判 本文二八五頁、索引六頁、定価 九八〇〇円